

C 7 献立自動作成システム（第2報）－分類法（その2）

福岡教育大学 ○近葉美希 八尋剛規 澤田吉苗

目的 第1報では、献立の自動作成のために分類法を用い、栄養所要量だけを考慮した場合の組み合わせ的爆発に対して、好ましくない料理の組み合わせを避けられることを報告した。そこで本報では、料理の組み合わせの適否とそのシステムの使用感を調べ、分類法の有効性を明らかにする。

方法 分類法は前回と同じものを用い、1年間分の献立を15回作成した。その間に選択された回数を料理ごと、及び、栄養所要量充足率の設定範囲ごとに調べ、料理の組み合わせの適否とシステムの使用感について検討した。ここで設定範囲は第1群から第3群までを0～200%とする。第4群に関しては、100%を基準とした。その組み合わせによって76パターンの設定範囲について調べた。

なお、システム開発にはC言語を用い、OSはMS-DOS、機種はEpson 386noteA+ 40MHDD等を使用した。また、サンプル献立作成には、C言語(gcc Ver.1.39)、OSはSun OS 4.1.1、機種はSPARC SERVER 490を用いた。

結果 栄養価の条件を変えても、1. 献立作成に選択された料理の回数にはあまり差異がなかった。2. 同じ料理の組み合わせはほとんどみられなかった。3. 料理の組み合わせ数に差はみられなかった。このことから、分類法を取り入れて家族の条件に近い献立を作成できることがわかった。しかし、システムの使用感からは、入手困難な材料が入っている料理が選択されるなどの問題があげられ、さらに分類法を検討する必要がある。